

天真正伝香取神道流は室町期に興った武術流派で、
その特徴は剣術のみならず、居合術・薙刀術・槍術・
柔術・手裏剣術など、いわゆる武芸十八般の総合
武術として伝承されてきたことにある。



兵法は平法なり——一世を風靡した総合武術

天真正伝 香取神道流

(千葉県無形文化財)

文=飯篠快貞
(天真正伝香取神道流二十代宗家)
監修=大竹利典
(天真正伝香取神道流師範)
居合術演武=京増重利
(天真正伝香取神道流師範代)
撮影=杉本保夫



居合術

香取神道流の居合術は、片膝を立て姿勢を低くした「居合腰」(右下の左側の写真を参照)からの跳躍技法に特徴がある。機敏な跳躍力と前後左右に素早く動ける身法が重視され、抜刀するなり真上に跳躍。刀を水平に抜いて敵を片手斬りにする。これは、回流の秘伝「抜附之剣」と称される技で、咄嗟の攻撃に対応する刀法である。片手斬りのあと、今度は刀を頭上に振りかざして身を変転させ、真下に切り下げたり、あるいは突く技などが一連の動作の中で流れるように繰り返される。

日本武術の源流・天真正伝香取神道流は、飯篠・長威斎家直を流祖として下総の国香取の地に伝承する武術である。家直は六十歳にして香取大神に一千日の大願をたて、

原土佐守および卜伝、松本備前守、諸岡一羽斎、秀吉の軍師・竹中半兵衛、奥州白石城主・片倉小十郎、幕府旗本の伊庭軍兵衛などのほか、諸藩の代々指南役など枚挙にいとまが

将たちが学んだ膨大な修行法が残されている。流儀の特徴としては、戦国時代の流派であることから戦場で鎧を着用した技が多く、斬突の場所は甲冑の弱点、たとえば首



武神・経津主(ふつぬし)を祀る香取神宮。



流祖・長威斎家直とその妻の像。

脇、小手の裏、腰の直ぐ上、内股などである。ただ、当流の形稽古は一見ただだけではわかりにくい。一本の形の中に組み込まれた太刀数が圧倒的に多く、かつ素早いいため、互いにただ太刀を合わせているかのように見えるからである。これは他より形の特徴を盗まれないためであり、一本ごとの形稽古が非常に長いのは戦場で息切れやバテたりしないために日頃から訓練しているのである。

また居合術とは、夜道や屋内にて突然襲撃を受けた場合を想定し

齋戒沐浴、兵法に励み百錬千錬を重ね粉骨の修行の後、香取大神より神書一卷を授けられたと伝えられ、その後連続として現代に至っている。

有名な門流には上泉伊勢守、塚

ない。

当流は剣術、居合術、柔術、棒術、槍術、薙刀術をはじめ軍配法、築城法、天文地理陰陽気学までに至る総合武術として、古来より軍学者や武

て稽古を行い、最も優れた瞬発力をもって敵に対する技である。たとえば、暗い所では低い姿勢が最も有利であるため、低い姿勢から剣を繰り出す技を磨く。



飯篠家に代々伝わる「天真正傳神刀流目録之巻」。流祖・長威斎家直は修行の末、香取大神から兵法神書一卷を授けられたという。



なお、長威斎の得た兵法観は「兵法は平法なり（戦わずして勝つ）」である。これを最も端的に示す挿話（さすわ）が「熊笹の対座」として伝えられている。長威斎の武名を聞いた兵法者が訪ねてくると、長威斎は熊笹の上にゴザを敷いて座り、「さあ、どう

ぞ」と声をかける。と、兵法者はその超人的な凄さに気をなまれ、戦わずに退散したという。これ無用の憎しみを避けることになり、現在でもこの兵法観は生き続けている。

（いざさやすさだ）



剣術



香取神道流の剣術は現代剣道と違い、甲冑着用を想定した戦国期さながらの実戦剣法に特徴がある。したがって、狙う箇所は甲冑の急所、すなわち防備の弱い首・胴の脇・小手の裏・内股などである。練習では双方互いに打ち合い、攻防を繰り返しながら修練する。



棒術

「突けば槍、引けば刀」といわれるのが、棒術の特徴である。棒術の発祥は、戦場で槍の先が折れた場合、それでも棒の長さを利して戦う技法として発展したといわれる。写真は同流に伝わる「迫合之棒」という技で、敵が上段に打ちかかってくるのを清眼で留め、棒を返して横面を打ち、すぐ

に棒を返して一足踏み込み、急所を跳ね上げる——そうした一連の技の一瞬を捉えたもので、躍動感が伝わってこよう。なお、香取神道流では、他の武器でも同じであるが、棒術を磨くと同時に棒術に対する剣術をも併せて磨いていくことも重要視される。



二刀流

二刀流は宮本武蔵が最初に編み出した刀法ではない。古流派にいくつか伝わっており、香取神道流にもその技が残されている。ただ、大竹節範の話によると、「ここでは二刀流を磨めるといふよりは、二刀流に対する剣術を磨く」という意味合いが濃いそうである。

小太刀

小太刀といえは、佐々木小次郎が学んだ中条流が有名であるが、香取神道流には、清眼の小太刀といわれる技が伝わっている。敵が真つ向から打つてくるのを手裏で受け流し、敵の小手を打つ、あるいは上段に構えた瞬間を捉え、飛び込んで敵の喉を突く。



天真正伝神道流へ
入門致スニ於テハ
親子兄弟同門タリトモ猥リニ
他見他言致ス間敷ク候事

(「敬白神文証」より)

雑刀術

雑刀は平安末期に広く武士らに使われた武器である。香取神道流の雑刀術(五津之長刀)は、剣術同様、甲冑の弱点を狙う。写真は、雑刀で敵の喉を狙ったところであり、それを敵が同流秘伝の「はしかがる技」を受けて雑刀の方向を外したところである。



香取神道流